



Title	ゾロタヤ・オルダ750周年国際会議参加報告 : 付伝ジョチ・ハン廟参詣記
Author(s)	長峰, 博之
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 58-66
Issue Date	2020-07-31
DOI	10.14943/jacas.16.58
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88507">http://hdl.handle.net/2115/88507</a>
Type	article
File Information	JB016_016nagamine.pdf



[Instructions for use](#)

## ゾロタヤ・オルダ750周年国際会議参加報告

—— 付伝ジョチ・ハン廟参詣記 ——

長峰 博之

2019年、ゾロタヤ・オルダ(Zolotaya Orda。ジョチ・ウルス、キプチャク・ハン国、Golden Hordeなどとも呼ばれる。以下、本稿では「ジョチ朝」と呼ぶが、原文が「ゾロタヤ・オルダ」の場合にはそれに従う<sup>(1)</sup>)750周年<sup>(2)</sup>)を記念してカザン(ロシア連邦タタールスタン共和国)とカラガンドゥ(カザフスタン共和国)で国際会議が開催された。筆者は幸運にもその両方に参加し、報告することができた。本稿はその参加報告である。また、カラガンドゥ会議の際の伝ジョチ・ハン廟参詣記も付すことにしたい。

### ①カザン国際会議報告

「第6回国際ゾロタヤ・オルダ・フォーラム、パクス・タタールカ：ゾロタヤ・オルダ国家体制の起源と遺産、ゾロタヤ・オルダ750周年」という名のもと、6月26日～28日にタタールスタン共和国科学アカデミー歴史研究所において開催された。国際ゾロタヤ・オルダ・フォーラムは2年に1度開催されており、今回はその第6回とゾロタヤ・オルダ750周年を合わせたものとなった。プログラム上の報告数は82、参加国は11か国に及んだ(図1は本会議のプログラム)<sup>(3)</sup>。

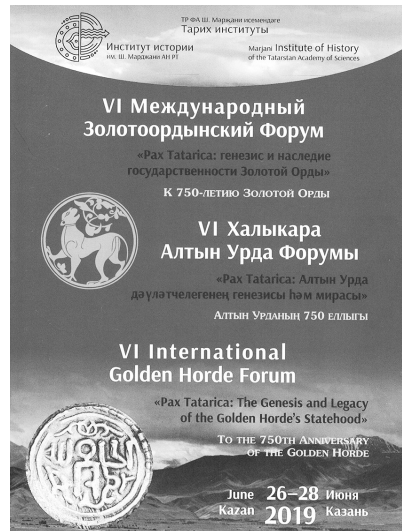


図 1

(1) 本政権の呼称をめぐる問題については、川口・長峰 [2013: 28-32]、Kawaguchi, Nagamine [2016: 167-170] を参照されたい。

(2) 750周年というのは、「ゾロタヤ・オルダはすでに事実上独立していたが、それは(1269年の)タラス・クリルタイの決議後により法的な観点で真の独立国家になった」という考え方によるものである [cf. *Kratkaya istoriya* 2019: 10-11]。タラス河畔のクリルタイについては、村岡 [1987] を参照。

(3) 本会議については、Aksanov [2019]、Uskenbai [2019] の報告も参照。

報告は以下の部会に分かれて行われた。

- 「ゾロタヤ・オルダとタタール諸ハン国の国家体制：伝統、思想、革新、危機」
- 「中世史料における「タタール」概念：名称／術語とその保有者の歴史的来歴」
- 「ルーシ・ウルス：ゾロタヤ・オルダにおける古代ルーシの地の服従の諸問題」
- 「「タタールの道 (Via Tatarica)」：大シルク・ロードにおけるゾロタヤ・オルダ」
- 「チンギス家諸国家における国家の貨幣政策、貨幣事業組織と貨幣流通の諸問題 (13～15世紀)」

以下、筆者の関心に即して印象深かった報告を取り上げよう。Csaba Göncöl氏は、ジョチ家のハンの系譜を『ムイーン史選』、『選史・勝利の書』、『チンギズ・ナーマ』<sup>(4)</sup>などを比較することによって検証した。基礎的な研究であったが、新たに刊行されたテキストを積極的に用いようとするものであった。Philip Slavin氏の報告は、14世紀のペストの流行を分析するためにチュー川流域の墓碑銘に注目するものであった。いわゆる「14世紀の危機」は近年の重要な研究潮流の一つであろう<sup>(5)</sup>。R. Yu. Reva氏の報告は、15世紀の貨幣にジョチ家のハンたちの名とともに諸部族のベク／アミールたちの名が見出されることを紹介し、そこから彼らの事績や権力のあり方を再検討する興味深いものであった<sup>(6)</sup>。V. V. Trepavlov氏はシバン家が「ウズベク」という呼称を帯びるプロセスを追った。概説的な内容であったが、「ウズベク」「カザク(カザフ)」などの呼称をめぐる問題、また13～14世紀のシバン家の動向は引き続き検討すべき課題であることを再認識した<sup>(7)</sup>。Mária Ivanics氏の報告は、外交文書にもとづいて16～17世紀の東ヨーロッパにおけるクリミア・ハン国の外交活動を分析する実証的なものであった。その他にもクリミア・ハン国に関する報告が多く見られ、近年の同国史研究の隆盛を物語っているように思われた<sup>(8)</sup>。筆者は、既発表論文[長峰 2003]をもとに、ジョ

(4) 本史料については、これまでタシュケント写本のみが利用できる状況にあった[ChN 2008]。しかし近年、タシュケント写本にない内容を含むが長らく閲覧不可能であった写本のファクシミリ、転写テキスト、ロシア語訳が刊行された[QT 2017]。本写本については、川口・長峰[2013: 43-44]も参照。書名や両写本の系統、異同の問題などは今後検討されなければならない課題であろう。

(5) ジョチ朝における「14世紀の危機」に関する成果として、Schamiloglu [2017]、Khaidarov [2018] などがある。日本においても「14世紀の危機」を問い直すプロジェクトが進められている[スラブ・ユーラシア 2019: 12-18]。

(6) その成果の一部はReva, Nedaivoda [2017]、Reva, Leonov [2018]、Zaionchkovskii [2019]などで公表されている。

(7) 関連して、「トグマク／トクマク」も検討されるべき呼称であろう。これについては、Togan [1994]が先駆的研究であり、近年ではMustakimov [2011]、Kenzheakhmet [2017]などが論じている。13～14世紀のシバン家については、Kostyukov [2010]が参考になる。

(8) 近年の主要な成果だけを挙げて、Zaitsev [2009]、Seityag'yaev [2009]、Kolodziejczyk [2011]、*The Crimean Khanate* [2012]、Gulevich [2018]、Królikowska-Jedlińska [2019]などがある。学術誌 *Krymskoe istoricheskoe obozrenie (Crimean Historical Review)* の刊行も注目される。また、トルコ、ロシア、ウクライナなどで史料のテキストや翻訳の刊行が進められている。

チ朝左翼にとってシル川流域のスグナクが有した意義について報告した [Nagamine 2020] <sup>(9)</sup>。

それにしても、近年の「ゾロタヤ・オルダおよびタートル諸ハン国研究センター」(カザン)の精力的な活動ぶりには目を見張るものがある。国際ゾロタヤ・オルダ・フォーラムの開催や学術誌 *Zolotoordynskoe obozrenie (Golden Horde Review)* の刊行に加えて、若手研究者の研究書を次々と刊行すると同時に、主要史料のファクシミリや転写テキスト、ロシア語訳を続々と世に送り出している<sup>(10)</sup>。もちろん、これらの研究の精度は個別に検証されなければならないが、同センターはいまやジョチ朝史研究を牽引する存在の1つとなっているだろう。

## ②カラガンドゥ国際会議報告

「サルアルカとアルトゥン・オルダ(ゾロタヤ・オルダ)：時間と空間、アルトゥン・オルダ750周年にむけての国際学術会議」という名のもと、10月23日～25日にかけて開催された。カザン会議に比べれば小規模で、参加者のほとんどがカザフスタン、その他数か国からの参加であった。プログラム上の報告数は35で、考古学に関する報告が多かった(図2は本会議のプログラム)。

ここでは、おもに歴史学に関する報告から印象深かった報告を取り上げたい。Uli Schamiloglu氏はこれまでの自身の研究をふまえ、改めてジョチ朝の部族制度および部族の移動について報告した。N. Ä. Atıghaev氏は、カザフ・ハン国に関する諸史料のうち、おもにペルシア語史料を幅広く紹介。Ä. Q. Mūqtar氏の報告は、諸史料の記述からジョチ朝におけるサライチクの歴史的意義を論じる興味深いものであった。総じて概説的な報告が多かったが、とりわけ興味深かったのは、N. Kenzheakhmet氏の報告であった。これまでのジョチ朝史研究ではあまり注目されてこなかった『明実録』などの明代史料や中国作成の地図からジョチ朝およびカザフ・ハン国に関する情報を抽出しようとするもので、ジョチ朝(カザフ・ハン国)史研究の新たな可能性を感じ

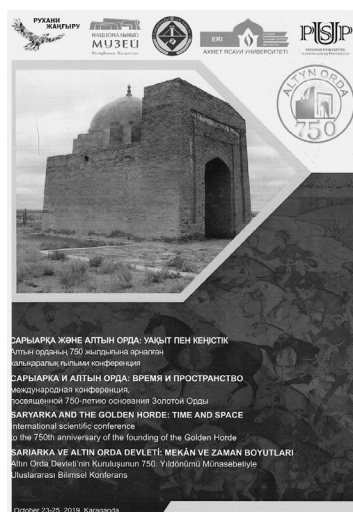


図2

<sup>(9)</sup> 本会議の成果の一部は論集 *Zolotoordynskoe nasledie* [2019] として公表された。また、*Integratsionnye protsessy Velikogo Shelkovogo puti* として、部分的に学術誌 *Zolotoordynskoe obozrenie (Golden Horde Review)* において公表される予定である。

<sup>(10)</sup> 近年刊行されたものとして、前述のQT[2017]の他、『カランドル・ナーマ』、『天国への道』、『五族譜』、『ラシード集史続編』、『イスラム・ギレイ・ハン史』、『七惑星』、『諸情報の要諦』などがある。さらに、『選史・勝利の書』および『七惑星』のロシア語訳を準備しているとのことである。その他、*Zolotaya Orda* [2016] (英訳 *The Golden Horde* [2017]) の刊行も注目される。



図3

させるものであった<sup>(11)</sup>。筆者は、『ムイーン史選』パリ写本にあるアク・オルダとキョク・オルダの王朝表に関する報告を行った [Nagamine 2019]<sup>(12)</sup>。

両会議に参加して、近年のジョチ朝史研究の急速な進展というものを肌で感じた。今回の両会議はロシア語圏の研究の比重が圧倒的に高かったが、それ以外においても優れた研究が続々となされている<sup>(13)</sup>。こうした膨大な研究成果を吸収し、そこから新たな研究を発信していくことが、いまわれわれに課せられている。

### ③伝ジョチ・ハン廟参詣記

カラガンドゥ会議を終え、いよいよジョチ・ハン廟参詣のエクスカージョンへと出かけた。見渡す限りの大草原を約500キロ、およそ7時間を車で移動し、ジェズカズガンに宿泊。翌日、さらに未舗装の道なき道を進むこと2時間ほど、ついにジョチ・ハン廟に到着した(図3はジョチ・ハン廟の外観、内部、遠景)。

<sup>(11)</sup> その成果の一部は Kenzheakhmet [2013]、Kenzheakhmet [2017] などで公表されている。

<sup>(12)</sup> 本会議の成果は論集 *Sariarqa jāne Altin Orda* [2019] として公表された。

<sup>(13)</sup> 例えば、本稿で言及した諸研究の他に、対マムルーク朝関係を分析する Favereau [2017; 2018]、イスラーム化の諸相を扱う論集 *La Horde d'Or* [2018] などがある。本稿に関連するものとして、前掲論集収録の Shingiray [2018] は、埋葬のあり方からジョチ朝の「土着的イスラーム (Indigenous Islam)」について考察している。



ジョチ・ハン廟については、古くは V. V. Vel'yaminov-Zernov や V. V. Bartol'd らによる言及があり、野田仁による考察もある。考古学調査は A. Kh. Margulan を嚆矢として行われてきている。こうした成果をふまえながら報告することにしたい。

ジョチ・ハン廟は、ジェズカズガンの北東 45 キロ、カラ・ケンギル川の左岸にある [Arkheologicheskaya 1960: 148–149]。ジョチ・ハン廟と伝えられているが、モンゴル帝国初期の君主の墓は秘されたことも鑑みて [羽田 1990: 4; 白石 2015: 316–318; 濱田 2020: 98–101]、これが本当にジョチのものであるという確証はない。創建期も残念ながら明確ではない<sup>(14)</sup>。ジョチの死については諸説があるが、『チンギズ・ナーマ』(1551～52年成立)はウルグ・タグ(ウルタウ)での狩りの際の落馬により亡くなったと伝え [ChN 2008: 7]<sup>(15)</sup>、『王の栄誉の書』(16世紀後半成立)には「ジョチ・ハン廟 (mazār-i Jūjī Khān) 近くのウルグ・タグ地方」という記述がある [ShNSH: 339b]<sup>(16)</sup>。たしかにこのジョチ・ハン廟は現在のウルタウ近郊にあり<sup>(17)</sup>、上記の諸史料の記述と符合はする。しかしここで重要なのは、野田 [2007: 8] が指摘するように、「16世紀後半において、すでにキプチャク草原(その東部がのちにカザフ草原と呼ばれる)にジョチのものともみなされる墓廟が存在していた」ことであり、そして現在にいたるまで崇拜対象であり続けていることであろう。参加者の1人が、「チンギス・ハンの息子たちのうち、墓廟があるのはジョチ・ハンだけだ」と自負しておられたのが印象的であった。

こうした墓廟に関して、人々が参詣しやすいように、墓廟は小高い場所、隊商または遊牧ルート、小川や湖のそばに設けられたという Ch. Ch. Valikhanov [1984: 192–193; cf. 野田 2007: 8] の指摘は興味深い<sup>(18)</sup>。まさにこのジョチ・ハン廟は川の近くにあり、周囲には緑が見られ、また、小高い丘のような地形になっていた [cf. Margulan 1948: 142]。この地がジョチに関連付けられる以前に、何らかの墓廟ないし特別な場所があった可能性も感じさせる。いずれにせよ、この地がいつから、そしていかにしてジョチと結び付けられるようになったのか、その後の崇拜のあり方はどのようなであったのか、このあたりにも興味深い歴史が潜ん

<sup>(14)</sup> Margulan の聞き取りによれば、かつて入口部分の装飾に創建期が記されていたが失われてしまったという。また、Margulan は、発掘された2体の人骨のうち、片腕のない男性人骨をジョチ、もう1体をその妻としているが [Margulan 1948: 142–143]、これは「ジョチが片腕なしで埋葬された」という伝承にもとづくもので、根拠薄弱であろう。

<sup>(15)</sup> カザフのキューイ(器楽曲)「アクサク・クラン」も『チンギズ・ナーマ』の記述に類似した伝承を伝える [赤坂 2005: 116, 280–281, n. 30; Kushkumbaev, Nurmanova 2020: 82–84]。

<sup>(16)</sup> 本史料のサンクトペテルブルグ写本については、東洋文庫所蔵のマイクロフィルムを閲覧させていただいた。

<sup>(17)</sup> ウルタウ近郊にはその他いくつかの墓廟が存在している。エディギユ(エディゲ)の墓廟(墳墓)と伝えられる塚もウルタウにあり [Bartol'd 1966: 396; Valikhanov 1984: 193; 坂井 2007: 43]、叙事詩にはエディギユがウルタウ山頂で死んだことを伝えるものもある [坂井 2001: 52]。これらのことは、ウルタウという場がある種の神聖な場と認識されていたことを窺わせる。

<sup>(18)</sup> 聖なる墓廟と自然条件の関連性については、[濱田 2005] も参照。

でいるように思われた。

ジョチ・ハン廟のあと、近郊にあるアラシュ・ハン廟(図4)を参詣した。アラシュはカザフ民族の伝説上の祖で、その廟がジョチ・ハン廟の近くにあることは大変興味深い<sup>(19)</sup>。入口の石碑に3ジュズ各部族のタムガが掲げられていたが(図5)、カザフスタンの研究者たちが「これは何部族、これは何部族」と熱心に話し込んでいた姿がまた印象的であった。



図4

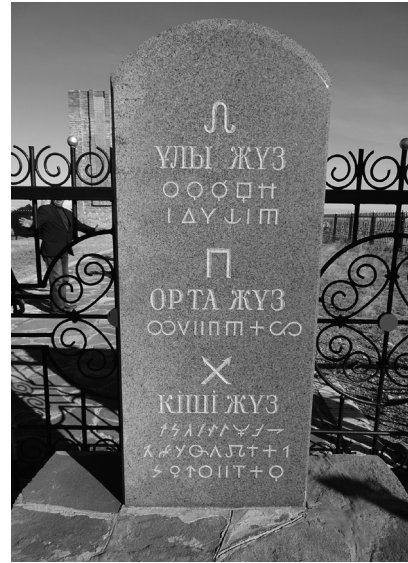


図5

付記：本稿執筆にあたって、川口琢司氏より貴重なご助言をいただいた。ここに記して謝意を表したい。本稿は JSPS 科研費 JP19K01029 の成果の一部である。

## 参考文献

- ChN. 2008. *Ötämiš Hājī, Čingiz-nāma*, Introduction, Annotated Translation, Transcription and Critical Text by T. Kawaguchi, H. Nagamine, Supervision by M. Sugahara, Tokyo: Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa.
- QT. 2017. *Utemish-khadzhi, Kara Tavarikh (Qara Tavārīkh)*, Transkriptsiya I. M. Mirgaleeva, E. G. Saifetdinovoi, Z. T. Khafizova; per. I. M. Mirgaleeva, E. G. Saifetdinovoi; red. I. M. Mirgaleeva. Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT.

<sup>(19)</sup> 廟はカラ・ハン朝時代のもものとされるが、16世紀以降にアラシュのものとして「創出された」可能性も指摘されている。また、カザフの口碑では、ジョチはアラシュの唯一の子とされているという[野田 2007: 21, n. 51, 53]。アラシュをめぐる議論については、野田 [2007: 21, n. 52]、Lee [2015: 140-162]、Sabitov [2018] 参照。

- ShNSh. Hāfīz Tanīsh b. Mīr Muḥammad al-Bukhārī, *Sharaf-nāma-yi Shāhī*, Ruk. SPbF IVRAN, D88. *Arkheologicheskaya*. 1960. *Arkheologicheskaya karta Kazakhstana*, Alma-Ata: Izd-vo AN Kaz. SSR.
- Aksanov, A. V. 2019. “VI Mezhdunarodnyi Zolotoordynskii Forum «Pax Tatarica: genesis i nasledie gosudarstvennosti Zolotoi Ordy» (Kazan', 26–28 iyunya 2019 g.),” *Zolotoordynskoe obozrenie*, 7(4), pp. 807–810.
- Bartol'd, V. V. 1966. “K voprosu o pogrebal'nykh obryadakh turkov i mongolov,” *Sochineniya*, 4, Moskva: Izd-vo «Nauka», pp. 377–396.
- Favereau, Marie. 2017. “The Golden Horde and the Mamluks,” *The Golden Horde in World History*, pp. 329–346.
- . 2018. *La Horde d'Or et le sultanat mamelouk: Naissance d'une alliance*, Le Caire: Institut français d'archéologie orientale.
- Gulevich, V. P. 2018. *Ot ordynskogo Ulusa k khanstvu Gireev: Krym v 1399–1502 gg.*, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT.
- Kawaguchi Takushi, Nagamine Hiroyuki. 2016. “Rethinking the Political System of the Jöchid,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.*, 69(2), pp. 165–181.
- Kenzheakhmet, Nurlan. 2013. “The Qazaq Khanate as Documented in Ming Dynasty Sources,” *Crossroads – Studies on the History of Exchange Relations in the East Asian World*, 8, pp. 131–156.
- . 2017. “The Tūqmāq and the Ming China: The Tūqmāq and the Chinese Relations during the Ming Period (1394–1456),” *Golden Horde Review*, 5(4), pp. 770–785.
- Khaidarov, T. F. 2018. *Epokha «Chernoi smerti» v Zolotoi Orde i privileguyushchikh regionakh (konets XIII – pervaya polovina XV vv.)*, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT.
- Kołodziejczyk, Dariusz. 2011. *The Crimean Khanate and Poland-Lithuania: International Diplomacy on the European Periphery (15th–18th Century): A Study of Peace Treaties Followed by Annotated Documents*, Leiden/Boston: Brill.
- Kostyukov, V. P. 2010. *Ulus Shibana Zolotoi Ordy v XIII–XIV vv.*, Kazan': Izd-vo «FEN» AN RT.
- Kratkaya istoriya*. 2019. *Kratkaya istoriya Zolotoi Ordy i tatarskikh khanstv. K 750-letiyu Zolotoi Ordy*, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT.
- Królikowska-Jedlińska, Natalia. 2019. *Law and Division of Power in the Crimean Khanate (1532–1774): With Special Reference to the Reign of Murad Giray (1678–1683)*, Leiden/Boston: Brill.
- Kushkumbaev, A. K., Nurmanova, A.Sh. 2020. “Zolotaya Orda i istoricheskaya pamyat' kazakhov i no-gaev,” *Ezhelgi tarikhting tamirshisi*, Almatī: «Qazaq universiteti», pp. 80–89.
- La Horde d'Or*. 2018. *La Horde d'Or et l'islamisation des steppes eurasiatiques*, Sous la direction de Marie Favereau, Presses Universitaires de Provence.
- Lee, Joo-Yup. 2015. *Qazaqliq, or Ambitious Brigandage, and the Formation of the Qazaqs: State and Identity in Post-Mongol Central Eurasia*, Leiden/Boston: Brill.



- Margulan, A. Kh. 1948. "Arkheologicheskie razvedki v Tsentral'nom Kazakhstane (1946 g.)," *Izvestiya AN Kaz. SSR. Seriya istoricheskaya*, 49(4), pp. 119–145.
- Mustakimov, I. A. 2011. "K voprosu o semantike termina «Togmak» v vostochnykh istochnikakh XV–XVII vv.," *Istoricheskie sud'by narodov Povolzh'ya i Priural'ya*, 2, Kazan': Izd-vo «Ikhlas», pp. 283–287.
- Nagamine, H. 2019. "On the *Jadwal* of Kök Orda and Aq Orda in the Paris Manuscript of *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī*," *Sariarqa jäne Altın Orda*, pp. 40–48.
- . 2020. "Sygnak kak «port Dasht-i Kypchaka» i «gorod-mavzolei»: period ot pravleniya levogo kryla Dzhuchidov do osnovaniya «Kazakhskogo khanstva»," *Zolotoordynskoe obozrenie*, 8(3), pp. 533–551.
- Reva, R. Yu., Nedaivoda, A.V. 2017. "Monety s imenem amira Vakkasa i dva pravleniya Makhmuda, khana Bol'shei Ordyy," *Vestnik NGU. Seriya: Istoriya, filologiya. 16(7): Arkheologiya i etnografiya*, pp. 151–159.
- Reva, R. Yu., Leonov, B. I. 2018. "Bikbazarskaya moneta s imenem Idigeiya i vopros o lokalizatsii monetnogo dvora «Bik-bazar»," *Numzmaticheskie chteniya gosudarstvennogo istoricheskogo muzeya 2018 goda*, Moskva, pp. 78–83.
- Sabitov, Zh. M. 2018. "Proiskhozhdenie termina Alash," *Global-Turk*, #1–2, pp. 131–139.
- Sariarqa jäne Altın Orda*. 2019. «*Sariarqa jäne Altın Orda: waqit pen kengistik*» *Altın ordaning 750 jildighina arnalghan khaliqaraliq ghilimi konferentsiya, Materialdari, Qaraghandi, 23–25 qazan 2019 j*, Qaraghandi.
- Schamiloglu, Uli. 2017. "The Impact of the Black Death on the Golden Horde: Politics, Economy, Society, Civilization," *Golden Horde Review*, 5(2), pp. 325–343.
- Seityag'yaev, N. S. 2009. *Krymskotatarskaya istoricheskaya proza XV–XVIII vv.* Simferopol': KRP «Izd-vo «Krymuchpedgiz».
- Shingiray, Irina. 2018. "An Islamicate Body: A Case Study of a Nomadic Burial form the Core Territory of the Golden Horde," *La Horde d'Or*, pp. 83–106.
- The Crimean Khanate*. 2012. *The Crimean Khanate between East and West (15th–18th Century)*, ed. Denise Klein, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- The Golden Horde*. 2017. *The Golden Horde in World History*, Kazan: Sh. Marjani Institute of History of the Tatarstan Academy of Sciences.
- Togan, Zeki Velidi. 1994. "The Origins of the Kazaks and the Özbeks," *Central Asia Reader: The Rediscovery of History*, ed. H. B. Paksoy, Armonk, New York: M. E. Sharpe, pp. 25–39.
- Uskenbai, K. 2019. "VI Mezhdunarodnyi Zolotoordynskii Forum," *Qazaqstan arkheologiyasi*, 4(6), pp. 136–141.
- Valikhanov, Ch. Ch. 1984. "O Kirgiz-Kaisatskikh mogilakh (molakh) i drevnostyakh voobshche," *Sobranie sochinenii v pyati tomakh*, 1, Alma-Ata: Glavnaya redaktsiya Kaz. sovetskoi entsiklopedii, pp. 190–197.

- Zaitsev, I. V. 2009. *Krymskaya istoriograficheskaya traditsiya XV–XIX vekov: Puti razvitiya: Rukopisi, teksty i istochniki*, Moskva: Izd. firma «Vost. lit.» RAN.
- Zaionchkovskii, Yu. V. 2019. “Politicheskaya kar’era kongratskogo beka Khaidara po numizmaticheskim dannym (seredina 1420 – nachalo 1440-kh gg.),” *Tyurkologicheskie issledovaniya*, 2(1), pp. 62–75.
- Zolotoordynskoe nasledie*. 2019. *Zolotoordynskoe nasledie: Materialy VI Mezhdunarodnogo Zolotoordynskogo Foruma «Pax Tatarica: genesis i nasledie gosudarstvennosti Zolotoi Ordy»*, Kazan', 26-28 iyunya 2019 g., 3, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT.
- Zolotaya Orda*. 2016. *Zolotaya Orda v mirovoi istorii*, Kazan': Institut istorii im. Sh. Mardzhani AN RT.
- 赤坂恒明 2005 『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房。
- 川口琢司・長峰博之 2013 「ジョチ・ウルス史再考」『内陸アジア史研究』28、27–51頁。
- 坂井弘紀 2001 「カザフの英雄叙事詩「エル＝エディゲ」」『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(1)』千葉大学大学院社会文化科学研究科、45–56頁。
- 2007 「ノガイ・オルダの創始者エディゲの生涯」『和光大学表現学部紀要』8、31–49頁。
- 白石典之 2015 「チンギス・カンの墓」白石典之編『チンギス・カンとその時代』勉誠出版、312–338頁。
- スラブ・ユーラシア 2019. 『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』158。
- 長峰博之 2003 「「キプチャク草原の港」スグナク——1470～90年代のトルキスタン地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に——」『史朋』36、1–23頁。
- 野田仁 2007 「カザフ・ハン国とトルキスタン——遊牧民の君主埋葬と墓廟崇拜からの考察——」『イスラム世界』68、1–24頁。
- 羽田正 1990 「「牧地都市」と「墓廟都市」——東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設——」『東洋史研究』49(1)、1–29頁。
- 濱田正美 2005 「天山の岩と泉と聖者の墓と」松原正毅他編著『ユーラシア草原からのメッセージ——遊牧研究の最前線——』平凡社、83–104頁。
- 2020 「聖者の執り成し——何故ティムールは聖者の足許に葬られたのか——」松原正毅編『中央アジアの歴史と現在：草原の叡智』勉誠出版、94–117頁。
- 村岡倫 1987 「カイドゥと中央アジア——タラスのクリルタイをめぐる——」『東洋史苑』30・31、175–205頁。

(小山工業高等専門学校)